



Title	近代日本における椅子開発とその社会的背景 : 寿商店「FK式」回転昇降椅子を事例として
Author(s)	岡田, 栄造
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53057
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

近代日本における椅子開発とその社会的背景

— 寿商店「FK式」回転昇降椅子を事例として —

岡田栄造／京都市芸繊維大学

本研究は社会的なレベルから見たデザインプロセスを考察するものである。社会的なレベルのデザイン活動は、多様な要素が複雑に絡み合っているために、それらを考察することは困難である。しかし、それらを上手く考察し、整理して理論化を行うことができれば、より長期的な視野に立ったデザインの政策づくりやデザイン振興が可能になると考える。

マクロな観点からデザインプロセスを研究することは、これまでも行われてきている。その一つに、住居観に関する一連の研究がある。これは、住居の計画に際して、住む側の要求をいかに把握すべきか、という問題意識から、住居観という概念を設定し、その地方的な差異、階層的な差異を明らかにしたものである。その後、人と物の関係とその変化についてより一般的な法則を解明しようとする研究が試みられている。主に住居を対象とした研究を通して、以下のことが示されている。それは、生活の変化とは、物に対する人の要求と、物の機能、両者の間に矛盾が生じ、これを克服するために「物」が変化して一定の秩序がもたらされる、このような動態である、ということである。

この成果から当初の目的である一般的な法則を導き出していくためには、具体的な事例の研究が多く蓄積される必要がある。しかしながら、必ずしもそれは十分に行われてきていない。そこで本研究では、具体的な事例として椅子を取り上げ、明治時代以降の日本における椅子の受容から椅子開発の進展、新しい椅子の類型としての事務用回転椅子の誕生までの一連のプロセスを詳細に考察した。

最初に、明治・大正期において、椅子がいかなる利便性を有する家具として受容されたかを明らかにするために、当時の起居様式に関する記述の収集と分析、考察を行った。明治時代から大正時代にかけて出版された書籍のなかで、日本の起居様式の将来を論じるために床座式と椅子座式の比較を行っているもの29冊を選び、資料とした。そして、この29冊の書籍から椅子座式生活に関する記述を評価語として抽出した。その際、得られた多数の評価語をより客観的に整理する目的で、ISM (Interpretive Structural Modeling) 法を用いて評価語の階層構造化を行った。それにより、明治・大正期の日本における椅子座式生活の評価構造を、「実用性」「先進性」「一般性」「経済性」という四つの観点からなる階層構造として示すことができた。「実用性」の観点からの評価に着目して考察を進めた結果、椅子は日本人の体格を良くし、勤勉にし、生活能率を増進するための家具として捉えられていたことが明らかとなった。

次に、上記の認識が一般的ななかで、いかなる問題が日本人による椅子開発を動機づけ、またどのような社会的背景のもとで椅子開発が展開したかを明らかにするために、特許制度発足後1950年までに登録された椅子に関する特許133件を収集し、その調査と分析を行った。特許明細書から考案の特徴を示す記述を特許の構成要素として抽出し、それらをもとに、統計的手法を用いて特許の類型化を行った。それにより、椅子に関する特許を「椅子の基本的な機能の改善」「基本的な機能と椅子以外の機能との両立」「複数の機構の組み

合わせ」の3つのグループに分類した。「椅子の基本的な機能の改善」に着目し、この特許類型が生じた時期の社会的背景を考察した結果、以下のことが明らかとなった。まず、明治初期の学制制定以降、学校での椅子の採用が進んだなかで、児童生徒の近視あるいは脊椎湾曲といった健康問題が発生した。その原因として照明の不備とともに机・腰掛けの身体への不適合が挙げられるようになり、その現状調査が行われ、明治30年代には児童生徒の体格に基づいて椅子の規格寸法が定められた。この寸法体系の規格化は、多様な体格に一つの椅子を対応させるための昇降機構の開発を動機づけていった。しかしながら、学校用机・腰掛けに関する研究が進んだ結果、大正末期になると、可変機構を備えた椅子は耐久性と配給の面で学校に適さないとする考え方が生じ、またオフィスという新たな需要の発生もあって、昇降機構の開発はその用途を事務用へと変化させていった。

最後に、学校用腰掛けの改善案のなかで提案された昇降機構が、大正末から昭和はじめにかけてどのように展開し、その結果、事務用椅子の原型というべき寿商店の「FK式」が誕生したかを明らかにするために、その間の詳しい経緯を考察した。寿商店に関する資料を調査するなかで、「FK式」の原案が、大正末期から昭和初期にかけて発明された「岩岡式」であることが明らかとなった。そこで、開発過程を「岩岡式以前の昇降機構の展開」[岩岡式の開発過程][寿商店による開発過程]の三つの時期に分けて考察した。明治時代以降昭和10年代までの特許および実用新案を調査し、椅子の昇降機構を提案している227件の考案について、その明細書を収集した。その結果、以下のことが明らかとなった。まず、岩岡式以前の1899（明治32）年から1938（大正13）年にかけて考案された昇降

機構には、7種類の方式があることが示された。岩岡保作は、そのなかの「滑動式-単脚」の昇降方式を参考に改善を進め、岩岡式を完成させた。岩岡式において、椅子の構造部材として鋳物が採用されたことは、金属加工業を椅子製造プロセスに介在させる必要を生じさせた点で、重要なポイントとなっていた。寿商店は、不況の時期を利用して金属加工業者の協力を得、当時先端的な素材であった可鍛鋳鉄（マリアブル鋼）を採用して、耐久性に優れかつ大量生産に適したFK式回転昇降椅子を完成させた。FK式は、社主であった深澤幸也の人的繋がりを活用してまず東京大学に納入され、また、事務合理化を検討していた三菱商店に採用されたことをきっかけに、多くの企業や官公庁、大学等に普及していったのである。

以上、本研究では、社会的なデザインプロセスの事例として、FK式回転昇降椅子の完成に至る一連のプロセスを明らかにした。その中で、まず、明治時代以降の日本において、椅子は「身体の発育」「勤勉な性格」「生活能率の増進」を可能にする道具として受容されて、学校や官公庁、軍隊に取り入れられていったことが明らかとなった。次に、日本における椅子開発の主要な流れのひとつが、学校用腰掛けの改善からはじまっていたこと、その動機は、明治中期に教育現場で発生した児童の健康問題を背景に「身体への適合」というコンセプトとともに生じていたことを示した。さらに、戦前の日本で事務用椅子として普及した寿商店のFK式が、学校用腰掛けの改善の延長で生み出されたことも理解できた。そして、その過程で提案された鋳物の使用が、後の家具製造システムの再編を条件づけた重要なポイントとなっていたことを指摘した。